

---

# 私の勝負下着

ヒグレカネキチ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

私の勝負下着

### 【コード】

N0944I

### 【作者名】

ヒグレカネキチ

### 【あらすじ】

知美は、今女子社員の間で噂の彼に告白をされた。次第に彼のとりこになっていく知美・・・

## 私の勝負下着

私は今井知美22歳。某会社のLをしている。

今日は私の彼の誕生日だ、彼と私は付きあってからやっと今日で1年になる。そう、丁度一年前の今日彼が私に告白して来たのだった。私も彼の事は入社当時から気になっていた。悪い噂も多少はあったが、女子社員に人気の彼には

「私など無理だな」と勝手に思い込んでいた。

しかしその日彼が急に私を非常階段の所に呼びだしてこう言ったのだ

「今日は僕の誕生日なんだ、だから僕は自分に自分で誕生日プレゼントをしたいと思っている」と言ったのだ。

「えっ！自分の誕生日プレゼントを自分に？」と彼の言っている意味が分からなかった。

「その事と私とどんな関係があるんですか？」と聞き返した。

「うん、それが大いに関係があるんだ、僕は入社当時から君の事が好きだった、君に一目惚れをしてしまったんだ。今まで中々君に告白できなくて、もやもやした気持ちでずっと過ごしてきたんだけど今日でその気持ちをはっきりさせようと思って、君に僕の気持ちを伝えます。今井さん、僕とお付き合いですか？」といきなり言うてきたのだ。

「私の事と貴方の自分自身の誕生日プレゼントとどういう関係があるんですか？」

「ほら、よく自分にご褒美と言って高級な物を買ったりするじゃないですか、簡単に言えばそれと同じかな」

「そんな、私は物じゃないんですから、そんな貴方の勝手にいきなりそんな事いわないでください」と私は怒った振りをした、

しかし内心は嬉しかった。私の事を自分自身の高級プレゼントとして見てくれているのかと思うとなんだか高級デパートに飾ってある高級ブランド品のように自分が思えてしまったのだ。しかし反面「そんなに簡単に落ちる女じゃないですよーだ」と彼に言っている自分もいた。

「今ここで返事はいりません、後からでも結構ですから、良い返事をお待ちしています」と言って携帯電話を私に渡した。

去り際に「僕の今日の告白に了解して頂けたらこれで僕に電話を下さい」

と言いながらポケットからもう一つ携帯を取り出して

「これに繋がるようになっていきますので」

と言って帰って行った。私は非常階段の手すりにもたれながら、彼の携帯電話を見ていた。

「どうしようか、いきなり告白されたって困って・・・どうして困る事があるの、私も彼の事が気になっていたじゃない」と自問自答

した。

そんな事を考えながら1日経ち2日経ちそして1週間が過ぎて行った。そんなある夜彼の携帯が鳴ったのだ。私はドキドキしながらその携帯に出た。

「もしもし」と言うと彼の声が聞こえた。

「知美さん、どうですか？考えて頂けました？電話がこないの待ち切れずに僕からしてしまったが僕の気持ち、どうか受け取って下さい」と言ったのだ。

私はもう自分の答えは決まっていた「分かりました、こんな私でよければお願いします」と言った。

彼は喜んでいた。「ありがとう！知美さん、君に渡したその携帯は僕と君だけのホットラインとして使って行くからそのまま君が持っていてくださいね」

「ホットラインですか、分かりました」何だか私が特別な人になったかのようにとても嬉しくなった。

「今度の休みの日に早速何処かに出かけませんか？何処に行きたいか決めておいてくださいね、どこでも連れて行くから」と彼が言ったのだ。

私は「考えておきます」と言って電話を切った。

そうして私はその年の彼の誕生日プレゼントになってしまったのだ。あれからもう1年が過ぎた、また今年も彼の誕生日がやってきたの

だ。彼は結構真面目で今までデートに出かけても私の手を握るのが精一杯のようでそれ以上のことはしてこないのだ。

いつだったか、海辺の公園を2人で歩いていた時のことだった、たくさんあるベンチは恋人同士で一杯だった。至る所で抱き合ったりキスをしていたり、熱々ぶりを見せつけられた。私は少しだけ期待と不安を胸に抱きながら公園を彼と歩いていた。そして一番端のベンチが空いていた。しかし彼はそのベンチには目もくれないで

「知ちゃん、ここは少し刺激が強すぎるね」と言ってそのまま車に戻ってしまったのだった。

私は少し拍子抜けしたがそんなシャイな彼が可愛く思えた。私と付き合う前の彼の噂は遊び人だの、何人も女がいるだのそんな怪しい噂ばかりだったのだ。しかし本当の彼はシャイで優しくそして男らしい一面も備えた噂とは程遠いかわこいい男性だった。

そんな彼に私はどんどん引き込まれて行った。そして今日は彼の誕生日、何をプレゼントしようか迷っていた。そしてデパートに行って色々見て回ったのだがこれと言って良いのが見つからない。私は婦人服売り場にフラフラと入って行った。そこで目にした物、私は「これだ」と思い、それを2種類と紺色のワンピースを買って自宅に戻った。

今日は「私が料理を作るから2人で私のアパートで誕生日パーティーをしようね」と言っておいたのだ。

手作りのケーキにサラダやスパゲッティそしてフライドチキン、すべて作り終えてから、私はシャワーを浴びた。身体を丹念に洗うと言うより磨くと言った方が良いと思うくらいに丁寧に洗った。シャワールームを出て身体を拭きながら姿見に自分を写した。バスト、

ウエスト、ヒップ、すべてオーケーと自分で鏡を見ながら確認した。そして今日デパートで買ってきたそれを袋からだした。売り場でのキャッチコピーが「大切な人との初めての・・・勝負ブラ&ショーツ」と出ていたのだ。

私は恥ずかしさをこらえて白のフリル付きで小さめのリボンが付いているブラとショーツそしてピンクで総レースの大きめのリボンが付いているブラとショーツを買ってきたのだ。今日は清楚な感じの白を付けることにした。そしてこれも今日買ってきた紺の大きなリボンが付いていて少し胸の所が開いているワンピースを着て彼が来るのを待っていた。

「今日の勝負下着に勝負服、彼は気にいつてくれるかな、このリボンの意味が分かるかな？」

と思った、なんだかいつもより大胆な

私がいる。去年の誕生日は彼が「自分へのご褒美だ」と言って私自信を自分のプレゼントに選んだ。今年の誕生日は私から彼へ私自信をプレゼントしようと考えたのだ。

しかし彼が私をふしだらな女と思わないだろうか・・・なんだか心配になってきた。

そんな事を考えていると、彼が来てしまった。そんな事を考えていると、彼が来てしまった。ドアをノックする音が聞こえた。私はドアを開けた。彼が立っている。

そして私は初めて彼を自分の部屋に招き入れた。最初彼は部屋に入るのを躊躇していたが、強引に部屋にいれた。

そして私は「誕生日おめでとう」と言っただけのホッペに背伸びをしてキスをした。彼は顔を真っ赤にして「ありがとう」と言っただけで頭の先から足の爪先まで見下ろして行った。

「今日の知ちゃん、すつごく綺麗だ」と言いながらワンピースのリボンに目を止めて「知ちゃん、もしかして君自身が僕のプレゼントになっているのかな？」と聞いてきた。

「私が、プレゼントではお気にめさないかな？」と意地悪そうに言ったのだ。すると彼は私を思いつきり抱きしめてキスをしてきた。

私はびつくりして「お料理が冷めてしまうから・・・」と言ったがもう彼は止まらなかった。

そしてすっかり勝負下着のリボンも彼に見られてしまった。

私達はその夜結ばれた。そしてその半年後

私は今井知美から橘知美に変わったのだった。

その時の勝負下着は今も大切な私の宝物になっている。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0944i/>

---

私の勝負下着

2010年10月9日17時22分発行